

献呈の辞

林陽一先生を送る

後藤弘子

林陽一名誉教授は、令和五年三月三十一日に、千葉大学での三六年という長きにわたる勤務を終えられた上で、定年退職され、令和五年四月一日付で名誉教授となられた。ここに、林陽一先生の退職をお祝いした退職記念論文集を献呈するにあたって、一言先生への感謝の言葉を述べたい。

私が林先生の同僚という榮譽ある地位につけたのは、法科大学院の発足があったからである。林先生ご自身も教授会等のあいさつで述べていらっしゃったように、千葉大学大学院専門法務研究科の発足は、林先生にとっても本学法学部門にとっても一大イベントであった。林先生は、法経学部（当時）における法科大学院設置準備委員会委員長として、法科大学院の設置のために、研究・教育組織の整備にあたり多大なる尽力をされた。私はお声がけいただく対象であったために、詳しい経緯を述べることができないが、法科大学院設置に対しては反対もあつたと聞いている。

その反対を乗り越え、また、言うまでもなく、法科大学院の設置基準に関して厳しい条件があるなか、それをクリアするために林先生は、当時の同僚の先生方と多くの会合を重ね、千葉大学らしい法科大学院の制度設計をされ、また、教員候補者の人事を行うなど多大な尽力をされたと同っている。専門法務研究科の標語であり、千

葉大学法科大学院の教育を支えている「生きて一人ひとりのために」という言葉は、その中で生まれたものである。

刑事法分野の先輩である林先生とは、同僚として二〇〇四年四月以降一緒に過ごさせていただき、法科大学院の学務委員を林委員長のもとで務めたこともあった。林先生の二度にわたる研究科長在職時には、教授会でその采配の見事さに感銘を受けることも多かった。それは、のちに私が研究科長になった際に、林先生だったらこのような時にどうされるのかを考えるロールモデルとなった。それだけではなく、刑法研究にとつても、その真摯で実直な研究態度は、常に私の研究のロールモデルであり続けた。

林先生は、法科大学院設立以来、情報担当として、入試パンフレットをはじめとする入試関係の業務や、全学の Moodle 導入以前から学生との連絡手段として構築された研究科独自の「授業情報」ページを作成するなど、法科大学院において求められる学生に対するきめ細やかな指導が可能なシステムを構築運営された。

全学の方針により、部局独自のシステムは廃止されたが、今でも、あの「授業情報」ページの使い勝手のよさや、情報共有の方法を懐かしく思う。それぞれの教員がアップした情報を相互に見ることができる「授業情報」のシステムが、初期の千葉大学専門法務研究科教員の一体感を生み、それが全国一位の司法試験合格率となって結実したと確信している。

私が研究科長の際、数年後に控えた林先生の退職を前提に、情報担当の業務を分散化するための方法を検討したが、その際、林先生にお願いしていた業務の多さに驚愕したものである。私たち教員が、研究・教育に関して、どれだけ林先生に支えられてきたかを思うとき、感謝の言葉も見つからない。

また、林先生は、教育能力にも優れておられ、特に事例問題に関しては、一目で「林先生作成」がわかる独特

の問題を出されており、いつもどうしたらこのような事例を思いつかれるのだろうか、思ったものだった。さらに、法科大学院で担当されるすべての科目において、判例、学説、資料及び設問を刑法の論点ごとに整理して配列した教材（多いもので二〇〇頁）を毎年作成されるなど、何事においても、手を抜かない先生の姿勢は、教育におけるロールモデルでもあった。

刑事法分野では、私は林先生の一歳年下で、しかも刑事政策や少年法という王道とは言えない分野を専門としていたこともあり、何かあれば「林先生に伺ってみます」というフレーズを多用し、先生に頼り切っていた。それは人事についても同じで、常に林先生にお任せしてきたことで、過去・現在において、すばらしい刑事法研究者を同僚に迎えることができた。

林先生が退職されることは、私にとっても法学部門にとっても大いなる打撃で、大きな支柱を失ったという気持ちでいる。言葉に表すことができないほどの感謝を込めて、この論文集を林先生にささげたい。

林先生、本当に長い間ありがとうございました。